

## 序 論

ヨーロッパの美術館では、パステル画は、油絵などとは別室で展示されていることが多く、ほの暗い中で一種独特の虹彩を放っていると云われている。パステル画には、確かに、他の絵具にはない美しさの秘密が、内在しているのであろうか。それが、絵具の如何なる特質により顕われるかを探求するのが、本論の課題である。その為に、パステルの長い歴史の中で、誰にも親しまれる花々を、独立した花瓶の花束として描いたオディロン・ルドンを取上げて、考察する。

オディロン・ルドンの、パステルで描く<sup>(図1)</sup>花瓶の花束(注1)が、何故あのように美しいのか。あれらの作品の花には、自然の花でありながら、自然界に存在しないような、自然の美を越えた何かが、内在していると思われる。

人間にとって、自然界の中で、一番に身近にあり美しいもの、それは花であると思われる。古今東西、人間は、自然の花々を愛して、見るだけでなく絵に描いて来た。それらは必ずしも、変らぬ同じ思いで描かれたものでなく、時代の思想や生活の移り行きにより、違った姿となった。花瓶の花束を見て、何を感じるだろうか。まず、その色彩や造形の美しさが目に入り、次には、現実の花と、どれほど似ているかに、思い至るのではないだろうか。ルドンの描く花瓶の花束には、個々の具体的な花々にはない別の深い魅力を、ルドンは花に込めていると思われる。それらも、人の心に深い感嘆の念を起すのである。

ルドンの言うところの「見られた現実を認めつつも、感じられた現実の中にある」(注2)ものが、真の芸術だとすれば、ルドンの花瓶の

花束から発信される美しさは、自然の美を纏った、彼の心の内面に感じられたまぼろし（注3）の世界の現れに他ならないのである。ルドンのまぼろしの世界は、どのように生まれたのであろうか。 生い立ちを、跡付けることにより、その秘密を探ってみる。

ルドンの花瓶の花束に内在する美しさの秘密は、どのように描かれたのだろうか。画家は、自分の絵画の技法について、ほとんど言葉にすることがない。ルドンも例にもれず、なぜパステルで描いたのか、どのように描いたのかを、説明しない。画家の手の内を、見せはしないのである。これは、無意識のうちに、手に染み付いた手業であり、説明できるようなものでなく、それが巧みであればある程、自ずから現れて芸術作品となる、と云えるのであろうか。いかに内面の思想が深く、真実を湛えようと、表現の手法なしでは、芸術は創造されないと思われる。

花瓶の花束の中で、ルドンが取り入れた描画技法を検討して、その神秘の美しさの秘密を探ってみたい。 その中で、ヨーロッパ絵画における描画材料として、特異な美しい輝きを、顔料そのものに内包していると思われるパステル絵具について、考察したい。パステル絵具は、それだけで、心を和ませるのであろうか。

ルドンは、木炭などを中心とした黒の世界から色彩の世界に入った頃に、云っている。

「パステルを使うことで、私は、自分の夢に、より大きな造形性を与えることができるんじゃないかという希望を、再び抱くようになりました。私を和らげてくれる、或るよろこびが含まれています。」

（注4）

序論 注記

(注1) 花瓶に生けた花束という、自然を対象にした具象絵画こそ、見えるものと感じられるものの二元性を克服した、ルドンにとっての芸術的な結論であると思われる。花々を添えた肖像画や屏風および壁画は、装飾絵画としての花々である。(筆者注)

(注2) 「ルドンは写実主義の客観描写そのものについて非難めいたことは一言もいっていないことである。ただ、それだけでは不十分であるといっているにすぎない。それというのも、絵画の基礎として見られた現実の重要性はみとめつつも、真の芸術は感じられた現実のなかに存在するのだ、というこの内面的な画家ならではの信念があるからにほかならず、(…)。」

本江邦夫著、「オディロン・ルドン、光を孕む種子」(みすず書房、2003) p. 212。

Odilon Redon, “Salon de 1868,” *Critiques d’art*, 17 mai 1868, p. 56.

“ ( … )  *tout en reconnaissant pour base la necessite de la realite vue, pour eux l’art veritable est dans la realite sentie ( … ) ”*

(注3) 「(…) 見ていると心が落ち着いて、ルドンのまぼろしの美感の中へ引き込まれる。(…)」

片山敏彦著、「オディロン・ルドン、花の中の女、解説」(『美術手帖』通巻68号、1953年) p. 20。

(注4) Odilon Redon, “Confidences d’artiste pour mon ami Edmond Picard,” *Critiques d’art*, 15 juin 1894, p. 40.

“*J’ai repris, avec le pastel, l’espoir de donner a mes songes plus d’exteriorite, si possible. Les tons ont une joie qui me repose ; ( … ) ”*